げたり、回鶻卽ち隋に韋紇と稱したるものも、實にまた其の一部として記さるゝ所なり、されば回鶻たるものは、隋時鐵勒中の一部として、鐵勒なる總稱の下に呼ばれたりしものなるに於ては、もとより異論あるべきに非れども、然も鐵勒は卽ち回鶻なりと見、隋書の鐵勒傳を以て、直ちに廻紇傳としたるは全然認む可らざる所なり、Chavannes 氏は Documents sur les Tou-kiue (Turcs) occidentaux 中に、舊唐書の廻紇傳を譯出したりしも、此の一節につきては只だ忠實に翻譯を施せる外、何等此の點に關する意見を附せず、されば歐洲の東洋學者の如き、多くは此の傳を依據として、回鶻と鐵勒との兩名を同一視するの誤謬に陷り、彼の Marquart 氏の如きも、西紀第七世紀の初めの著者なる Theophylactus Simocatta が Ὀγῶρ 河に沿ひて Türk の可汗に征服せられたる Ὀγῶρ なる部族ありと記せるに就きて、「Ὀγῶρ は疑も無く當時支那人より Tʻie-le (鐵勒) と名付けられたる Uigur なり、Türk 卽ち突厥の歴史は、西紀五四六年に鐵勒を征伐し降伏せしむるに及びて開かるゝに至れりと記せり (Die Chronologie der alttürkischen Inschriften S. 95)。[補②] 此の五四六年の鐵勒征伐とは、北史突厥傳に見ゆる大統十二年（隋書同傳には年を記さず）突厥が蠕蠕の爲に鐵勒を擊破し、其の衆五萬餘落を降せることをいへるものなり、されば氏は北史に鐵勒と書けるものを以て、Uigur（卽ち回鶻）と解釋したるものにして、其の誤解たるや勿論なり、而してかゝる說明は、實に舊唐書の此の傳の記事に基けるものなりとす。凡そかゝる部族に關する漢史の記載は、全體と部分との關係を區別する點に於て、頗ぶる曖昧なるものあり、歐洲の學者にして、自から漢文を讀み得ざる人々の、之が爲に誤らるゝもの多きは止むを得ざる所なりといふべし。

② 北史鐵勒傳の記事の隋書同傳の記事と同一なるは、更ためていふ迄もなし、こゝには只だ隋書のみを引けり。

③ 新唐書回鶻傳に記する所を參照すれば、回鶻部は武后の時默啜に迫られ、契苾・思結・渾の三部と共に磧を度りて甘涼の間に遷り居りしものなるが、こゝに及びて再び漠北に復歸するに至りしものなりとす、但し甘涼に遷り住みしものも、もとより其の一部に過ぎず、一部は依然として漠北に在りしものなることは、下に述ぶる所によりて知り得べし。

④ 葉護逸標苾は卽ち骨力裴羅を指せるものにして、舊唐書廻紇傳には葉護頡利吐發と記し、册府元龜卷九六七繼襲篇にも同樣に記せり、頡利吐發は頡吐發と書かるゝものと同じく突厥語の iltäbär に相當すれば、逸標苾も同一語を寫せるものなる